

あったか♥復興支援

わすれない 3.11

応援しよう！都筑から

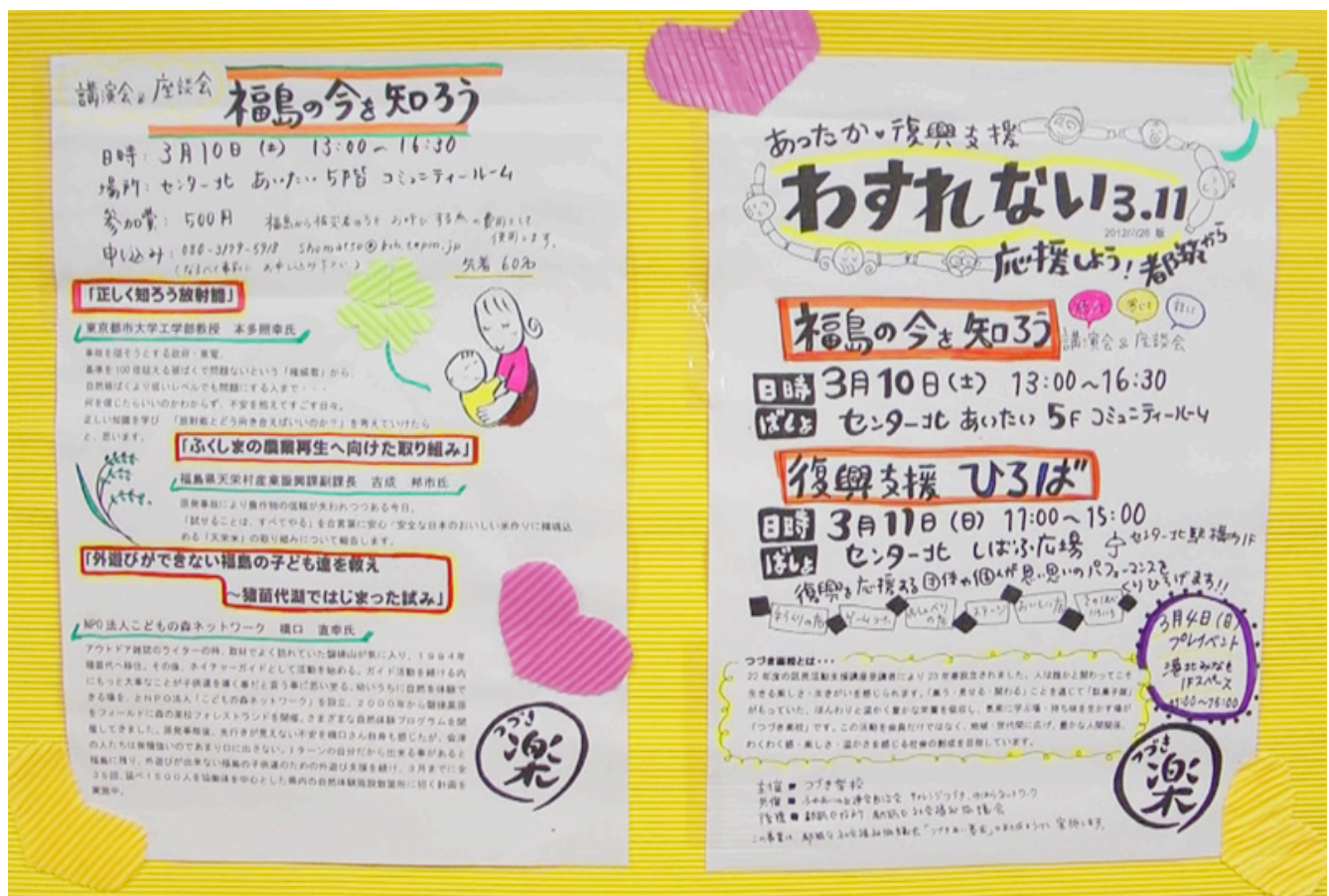
1日目：2012年3月10日（土）13:00～16:20 講演会&座談会

2日目：2012年3月11日（日）11:00～15:00 復興支援ひろば

主催：つづき楽校

共催：ふれあいの丘連合自治会、チャレンジつづき、のはらネットワーク

後援：都筑区役所、都筑区社会福祉協議会



《つづき楽校からの開催にあたってのメッセージ》

1年前の3月11日を忘れないでほしいという東北の方の想い。

3月11日を忘れてはいけないというみんなの想い。

都筑区に住む私たちが、都筑区にてできること。

あたたかい想いをつなげて、これからもずっと応援しつづけていきたい。

そんな気持ちをかたちにしたはじめの一步です。

《はじめに》

平成 22 年度・市民活動支援講座“つづき楽校”での感動の卒業式が執り行われたのは、2011年2月3日のことでした。それは、市民（都筑区民）活動としての“つづき楽校”のスタートの日でもありました。

市民活動支援講座“つづき楽校”を受講された皆さんは、講座修了とともに、市民（区民）団体としての任意団体“つづき楽校”を発足します。

“つづき楽校”は、日本全国に広がっている“だがしや楽校”の流れを受け、区民の・区民による・区民のためのボランティア活動団体です。

『集う・見せる・関わる』ことを通し『駄菓子屋』が持っていたほんわりと温かく豊かな栄養を吸収し、気軽に学ぶ場・持ち味を生かす場が“つづき楽校”です。

人は、誰かと関わってこそ、生きる楽しさ・生きがいを感じることができます。“つづき楽校”では、メンバーだけでなく、地域・世代間に広げ、豊かな人間関係・わくわく感・楽しさ・あたたかさを感じる地域社会の育成を目指しています。

それにしても、振り返って、“つづき楽校・卒業式”当時、2011年3月11日のことなど、誰ひとり予測することも、想像することもできませんでした。そのことを思うと、逆な見方として、“つづき楽校・卒業式”を2011年2月3日の執り行ったことが良かったのではないかと感じております。

あの日は、都筑区でも大きく、そして長く揺れました。東日本大震災により、神奈川県でも“だがしや楽校”に関係するイベントが中止になったり（横浜市緑区）、延期になったり（藤沢市）するなど、大きな影響が生じました。

そんな中、“つづき楽校”では、新たなスタートを切ろうとしていた時、東日本大震災に見舞われました。これは、ある意味“つづき楽校”の力（市民力）が試されることになったわけです。当時、過剰な自粛ムードに、日本国中から『元気』という言葉が消えかけていたのです。

しかし、本当の支援とは、私たち一人ひとりが『元気』に生きることが原点です。それをベースに、私たち一人ひとりが出来ることで支援することです。それは、支援にも、いろんな方法・やり方・形があるからです。

“つづき楽校”は、4月27日には第1回の定例会を開きます。5月25日の第2回定例会からは『自分店（みせ）』を始めます。その後は少なくとも毎月1回は活動を展開します。

活動場所は“えだきんパーク”。『自分店（みせ）』は、読み聞かせからミニ講座・発表・販売ま

でいろいろあります。実験教室・網戸の張り替え、手作り品展示、草木・野菜の販売、しゃぼん玉で遊ぼうなど内容は多彩です。果実酒をつくろうもやりました。

さらに、6月26日には“つづきっこ祭り”に参加、8月24日には“えだきん夜店市に参加、10月23日にはあざみ野縁日に参加します。12月11日には私（山口）も拝見した“年忘れあったか演芸大会”を開催します。これは、地域の人たちによる『自分みせ』の会でした。



↑ 読み聞かせ



↑ あざみ野縁日（アートフォーラムにて）

2つの写真は“つづき楽校”提供

こうして、“つづき楽校”は、自ら活動を展開することで、磨きが掛かり、活動内容も充実し、発展性が見えていきました。

それはまさに『成長』であります。都筑区が開催した市民活動支援講座から始まった“つづき楽校”でしたが、今では完璧に市民の手による活動に『成長』したのであります。見事であります。社会教育・生涯学習で、これだけの成果が見られる事例は、日本全国でも数少ないと思います。この背景には“つづき楽校”に関わる人たちが、“だがしや楽校”の本質をきちんと理解していたことを挙げなければなりません。

その“つづき楽校”では、東日本大震災から1年目を迎え、“あったか♥復興支援・わすれない3・11”を開催することになりました。

この事業については、私（山口）も、昨年10月頃には第一報を知りました。ですから、企画から準備そして開催まで、半年かけて入念に準備してきたことになります。

第一報を知った時、私は「凄いことをするな～」と思ったものです。なぜかと言いますと、当日は福島の人が都筑に来て講演するというのです。そうならば、準備では関係機関との調整など多岐にわたる作業が必要でした。おそらく、“つづき楽校”の皆さんは、相当大変な思いをされたのではないかと推察します。

その結果、無事に開催にこぎ着けることができました。



《プロローグ》

それでは、どうして“つづき楽校”が福島の人を招くことになったのでしょうか。これについては、都筑区在住の Yasuda さんと、今回招かれた福島県天栄村の産業振興課副課長・吉成邦市さんから、その経緯をお聞きすることができました。

◎福島県天栄村の取り組み

福島県中通り南部に位置する天栄村。人口は 6,117 人(2012 年 2 月 1 日現在の推計人口)です。

天栄村では「日本一美味しい米を目指そう」ということになり、“天栄米栽培研究会”を結成します。2007 年のことです。この取り組みについては、天栄村役場も一体となります。吉成さんは私(山口)のインタビューに「農家の人と一緒にやっています。それは『米を売れるようにしなければならない』というたったひとつの思いからです」と答えてくださいました。

その結果、天栄米は“米・食味分析鑑定コンクール：国際大会”にて 4 年連続、金賞を受賞するという快挙を成し遂げました。天栄米はブランド米の地位を確立したのです。

◎Yasuda さんの取り組み

鹿児島県出身で、都筑区仲町台在住の Yasuda さん。

その Yasuda さんが天栄村と出会ったのは、吉成さんの同級生という Nemoto さんから天栄村のついて教えてもらったのがきっかけです。4 年前のことだそうです。それがきっかけで“天栄米栽培研究会”会長で無農薬栽培に取り組んでいる岡部さんと出会います。Yasuda さんは、岡部さんから天栄米を買うだけでなく、「田植えや稲刈りの時にも来たい」と言います。そして、横浜や川崎の人たちを連れて、田植え・稲刈り・ホタルの観察会などを企画し、実行します。こうして、吉成さんと Yasuda さんは、田んぼで出会います。

Yasuda さんは言います。「天栄米は本当に美味しいです。我が家では土瓶で炊いています。美味しさの秘密は、粘土質である土壤が素晴らしいからと、水も素晴らしいからです。だから、天栄村に行くと、ポリタンクに水を汲み、持ち帰ります。天栄米は天栄の水で炊くことです。すると美味しくなります」と。

その Yasuda さん、昨年(2011 年)秋(10 月)になりますと、ポールウォーキングをやっている横浜の人たちと一緒に天栄村を訪れます。その中に“つづき楽校”代表の図子さんがいたのであります。

◎“あったか♥復興支援・わすれない 3・11”開催に向けて

日本一美味しいお米と評価された天栄米。そこへ襲ったのが東日本大震災と原発事故です。

田んぼは放射線に汚染されてしまいます。これまでの努力は水の泡になってしまうのではないかと、という危機に陥ります。それは、言葉では表現できないほど深刻なものでした。

しかし、4 月天栄村の人たちは立ち上がります。国や県に頼らず、自分たちの力で『汚染ゼロの米づくり』を目指したのです。

その取り組みについては、1 日目の講演会・座談会で詳しく紹介されました。それによりますと、その取り組みでは、いろいろな方法を試しましたが、苦渋の決断を迫られました。なぜなら、米への放射性物質の移行を抑えようとしますと、米の味が落ちてしまうかもしれないからです。しかし、ここは味よりも安全を重視しようと決断しました。これは世界初の試みだそうです。

その結果、天栄村で収穫された米を検査したところ、すべての農家の米において、放射性セシウムND（NDとは不検出のこと。天栄村の米は、検出限界 10 ベクレル以下だったということです）を達成しました。

その天栄村を訪れた“つづき楽校”の図子さんは、吉成さんと出会い、話をする中「来年（2012年）3月11日に、横浜・都筑区でイベントをやりたいので、講師として来ていただけませんか」と持ちかけます。これが今回の“あったか♥復興支援・わすれない3・11”開催のきっかけです。

“つづき楽校”では、半年間にわたり、開催に向けて、入念に準備しました。この間、福島県東京事務所など関係機関との調整も行いました。その努力が功を奏し、1日目の講演会・座談会では、東京都市大学の本多教授やNPO法人こどもの森ネットワーク（福島県猪苗代町）の橋口氏からも講演してもらうことになりました。また、2日目の“復興支援ひろば”でも、数多くの人や団体からの協力を得ることができ、たくさんのおみせが出されることになりました。

この準備の過程については、現地（都筑）から「みなさんが協力して、大イベントに向かっていきます。チームワークの良さとフットワークの軽さがすごいです」という報告が、私のところにも届いていました。

ここで私（山口）が申し上げたいのは、このような大事業を、特に1日目の講演会・座談会に関して、まったく市民の手で開くことは、“だがしや楽校”に於いて、全国的に見ても、前例がないということです。

シンポジウム的なことは、“だがしや楽校全国寄り合い”や公民館が関わって開かれたという例はありますが、市民の手作りによって開くというのは、全国に広まっている“だがしや楽校”とは言え、これが初めてのことであります。これ自体、快挙と言えます。



◎当日（2012年3月10日）を迎えて

この日の横浜市は前日に引き続き雨です。それも冷たい雨です。テレビに映し出された東京・渋谷では、雪が降っていました。

さて、横浜市営地下鉄・センター北駅で降り、改札口を出ますと、いきなり「山口さん」と声をかけられます。図子さんら“つづき楽校”の皆さんです。でも、都筑には何度も来ている私を待っていたわけではありません。（ごもっとも・・・笑） 福島からの人たちの出迎えです。

それでも、センター北は私も初めてです。それで、とりあえずは、会場の確認（下見）です。

講演会&座談会の会場は、ショッピングタウン“あいたい” 5階“コミュニティールーム”です。ショッピングタウン“あいたい”は、センター北駅とつながっています。雨にあたられることなく、エスカレーターに乗って5階へ行きます。5階に着いて、音楽好き（特に洋楽ロック・ポップスです）の私の目に入ったのは楽器屋さん。音楽魂が蘇りそうになるところをグッと堪え

て・・・施設内を見て回ります。“コミュニティールーム”は、フロアの南にありました。適度な広さで収容人員は60名です。

5階にはほかに、メガネ屋さん・歯科クリニック・賃貸住宅センターなどがあります。さらに目に付いたのが“ポポラ：都筑区子育て支援センター”です。小さな子どもたちが楽しそうに遊んでいます。なんでも、スタッフは、子育て中のお母さんや子ども好きな地域の人たちだそうです。

そのほか、見て回った印象として、センター南よりセンター北の方が、にぎやかに感じます。

改札口がある2階に戻りますと、天栄村の吉成さんが到着していました。それで、皆さんで昼食をいただくことになり、“あいたい”4階のお店に入ります。

◎映画制作者（監督）との出会いと取り組み

ところで、まるで吉成さんの付け人のような方が、2人おられます。しかも、ムービーカメラを取り出し、撮影しています。私もムービーカメラ（ハイビジョンカメラ）を持っていますので、「おやおや、この人たちは、なんだろう??」と思います。ここで早くも取材魂がムラムラと沸き起こってしまったのです。（今からこの調子では、最後までもたないかな?・・・笑）

名刺交換して、事情がわかりました。

2人は、桜映画社の原村監督と同じく桜映画社でアシスタント・ディレクターの細矢さんです。私が「山形から来ています」と言いますと、原村監督は、山形県にも頻繁に來ているそうで、上山市などで活動しているそうです。また、高畠町（有機栽培）のこともよくご存じでした。さらに、映画“よみがえりのレシピ”（※注1）の渡辺監督とも親交があります。

※注1：山形発長編ドキュメンタリー映画である“よみがえりのレシピ”は、山形県内でも次第に消えつつある在来食物をテーマに、生産者や料理人にスポットを当て、地域とは何か、食文化とは何か、食と農業とは・・・について描いている作品です。

山形県内各地で上映されているほか、製作委員会では、食育に関するイベント、料理教室なども開いています。

私（山口）の事務所（米沢市）にも製作委員会のメンバーが広報に訪れたほか、渡辺監督ともお住まいの鶴岡市にて懇談しています。

先にご紹介したように、天栄米は4年連続、“米・食味分析鑑定コンクール：国際大会”にて金賞を受賞しましたが、天栄村での「日本一美味しい米を目指そう」というこの取り組みは、2010年1月、NHK・ETV特集“よみがえれ 里山の米作り”の中で放送されました。実は、この取り組みを取材し、制作し、放送番組にしたのが、原村監督だったのです。

これは、原村監督にとっても思い出のある仕事になりました。山形県を訪問してことを紹介しましたが、これも原村監督の思い出によるものと感じました。美味しい米・農産物を作る、そのためには栽培方法にもこだわる・・・そういった農家の人たちの姿を追い、そして伝えることが原村監督の思いなのです。

あの原発事故によって、天栄村の田んぼも放射線によって汚染されていきます。原村監督も、言葉では言い表せないほど、心を痛めたことでしょう。

先にもご紹介しましたが、天栄村の人たちは、国や県に頼らず自分たちの力で『汚染ゼロの米づくり』を目指し、立ち上がります。原村監督は天栄村での活動を続けます。そして、天栄村の人たちを克明に追いつけます。そして、2011 年 12 月、NHK・ETV特集“原発事故に立ち向かう農家”の中で放送されます。

原村監督の天栄村での活動は、今年（2012 年）も続くことになりました。

今年（2012 年）12 月完成を目標に、長編記録映画“天に栄える村（仮題）”（耕作放棄田再生と放射能汚染ゼロへの挑戦）を制作することになったのです。原村監督は、映画“天に栄える村”制作委員会の代表としても活動しています。

ちなみに、制作委員会では、制作・上映のための資金協力者を募集しております。

この日は、その長編記録映画制作・取材のため、吉成さんに同行してきたわけです。吉成さん（天栄村）による“つづき楽校”での講演活動、及び翌日（3 月 11 日）の“復興支援ひろば”でおみせを出す吉成さん（天栄村）の活動を取材しよう、というわけです。さらに、吉成さんが招かれ、2 日間活動する“つづき楽校”についても取材が行われました。

そんなことから、私（山口）にも、原村監督や細矢さんのカメラが向いたのであります。

さすがはプロです。食事している時でもカメラを回しています。吉成さんと“つづき楽校”の人たちとの交流も、大切な場面になる（かもしれない）からです。確かに、こういう場面でこそ吉成さんと“つづき楽校”の人たちとの交流が見られるのです。

考えてみますと“だがしや楽校”でも“夜のだがしや楽校”の方が、本当の交流や学びにつながる例は数多くあります。

こうして、2 日間は、原村監督・細矢さん、そして私と、3 つのムービーカメラが“つづき楽校”の模様を撮影することになったのです。



◎まもなくスタート

やがて、NPO 法人こどもの森ネットワークの橋口さんも到着。

みんなで、会場のコミュニティールームへ向かいます。すでに受付が始まっています。

講演会・座談会ということで、今回はカメラ用の三脚を持参しました。原村監督からは「さすがですね」と言われたものの、会場は満杯となる 60 名に達し、とても三脚で撮影できる状態ではなくなりました。（山形・米沢から重たい思いをしながら持っていたのに・・・泣）

でも、それだけ大勢の都筑区民が集ったのです。これまた凄いことです。広報も含めた入念な準備の結果ではないかと思えます。



↑受付では、可愛いRちゃんもがんばっています。その隣りでは、早くも来場者と橋口さんとの交流が始まっていました。

ここまでだけでも、盛りだくさんの情報をご紹介します。

いかに今回の“つづき楽校”の取り組みが凄いことか、おわかりいただけたことでしょうか。また、今回の“つづき楽校”によって、数多くの新たな出会いがあったことも、おわかりいただけたでしょう。

しかし、これからが本番です。

それでは、1日目の様子からお伝えいたします。

なお、レポートでは、ところどころで私（山口）のコメントを入れております。

これは、今回の“つづき楽校”のテーマについては、少しでも視点・見方・解釈を誤りますとその趣旨から逸脱しやすいからです。それだけ、デリケートなテーマであります。

このような難しいテーマをあえて取り上げた“つづき楽校”の皆様には、心より敬意を表したいと思います。



2012 年 3 月 10 日（土曜日）横浜市の天気：雨のち曇り

【つづき楽校：あったか復興支援 わすれない3.11：1日目】

“つづき楽校：あったか復興支援 わすれない3.11”の1日目、講演会&座談会“福島のことを知ろう”（主催：つづき楽校）が、ショッピングタウン“あいたい”（横浜市都筑区中川中央1丁目）5階“コミュニティールーム”にて開かれました。

はじめに、講演会&座談会のプログラムをご紹介します。

講演 1

テーマ：正しく知ろう放射能

講師：東京都市大学工学部教授 本多照幸氏

講演 2

テーマ：ふくしまの農業再生へ向けた取り組み

講師：福島県天栄村産業振興課副課長 吉成邦市氏

講演 3

テーマ：外遊びができない福島子ども達を救え 猪苗代ではじまった試み

講師：NPO法人こどもの森ネットワーク 橋口直幸氏

会は定刻の午後1時に始まりました。司会は“つづき楽校”の井口さんです。

◎開会（司会：井口さんの挨拶）

きょうは天候が悪い中また寒い中、そしてお忙しい中、このように大勢の皆さん駆け付けてくださいます、本当にありがとうございます。

会場が一体となって、福島の実状を知る一助にし、皆さんと一緒に有意義な時間を過ごしたいと思いますので、よろしくお願いします。



◎主催者挨拶・・・つづき楽校代表：図子さんの挨拶

1年前、東日本大震災と原発事故が起こり、日本中が不安に襲われました。

これは1年で終わるものでなく、これからも続くことです。

“つづき楽校”として何ができるかを考えた時、（都筑区民）の皆様の不安や恐怖を少しでも取り除くことであり、被災地の人たちに何かの応援ができないものかと考え、企画しました。

原発事故によって、ここ都筑の皆様も恐怖心を取り除くことができません。

被災された人たち（原発の被害者）は、選択権もなく、自由もなく、泣く泣く自宅を離れていますが、私たちはそのように苦しんでいる人たちに、なかなか思いを寄せる余裕もありません。

「福島」と聞いて、二の足を踏むというのは、家族を守ることを考えますと、普通の姿です。



そこで、このあと、3人の方からの講演を聴いていただき、違う視点から「福島はそうではないんだ」と捉えていただき、安心してもらい、目線を変え、自分たちにもできることがあるのではないか、と考えてもらえれば、すごく嬉しいです。そして、今回のメインテーマである『都筑から応援する』という気持ちを持っていただきたいと思います。

ここで、図子さんの挨拶で、ちょっと気になったことがありますので、コメントします。

「都筑区民の不安や恐怖を少しでも取り除く」という趣旨・目的は私（山口）も賛同します。一概に「福島」というだけで「危険」とレッテルを貼ってしまうことは非常に問題です。

一方で、一概に「福島はそうではないんだ」つまり「安心なんだ」と思ってしまうことも非常に問題です。

福島市や郡山市など中通り地方は、避難対象地域ではありませんが、少なくとも、ところどころに放射線量の高い場所があるのです。すなわち、安心できる場所もあれば、危険なところもあるのです。そこを正しく理解しなければなりません。

その上で、自分たちができる支援を見つけ出し、実践することです。

『福島』と言っても、状況は実に様々です。一人ひとり、みんな違います。

『福島』を『一概に考えること』ほど、危険なことはありません。

それから、「福島は安心なんだ」という言葉ほど、私が住んでいる米沢市や山形市などに数多く避難されている人たちにとって、苦しませる言葉はありません。

《講演1》

◎テーマ：正しく知ろう放射線

◎講師：東京都市大学工学部教授 本多照幸氏

◎講師プロフィール（司会者紹介）

東京都市大学工学部原子力安全工学科教授。専攻は原子力環境工学、放射化学。理学博士。

元 IAEA 海洋科学研究所の特別研究専門官。現在、東京大学原子力研究所施設利用共同研究委員会専門委員、国連海洋環境保護に関する科学専門委員会専門委員などを務めています。

放射線と人への影響、汚染についてお伺いし、私たち各々の環境下で正しい行動をとることの一助となれば幸いです。

◎講演趣旨（チラシ記載）

政府の事故収束宣言にもかかわらず、原発は未だ不安定で、綱渡りの状態です。住民帰還もできず、関東にもホットスポットがあるなど、放射線汚染は深刻です。「放射線と人への影響」、「福島や都筑の汚染」について述べ、皆さんがすり替えの安全やことさらの不安の中から、各々の環境下で正しい行動をとることへの助けとなれればと願っています。

◎講演内容

本多教授は、次のように切り出しました。

本日は東京都市大学の先輩であるM教授から「こういう企画があるので話をするように」と依頼があり、「精一杯つとめます」と申し上げ、お引き受けしました。

ここで話をするのは、この1年間さまざまなことがあって、本来なら知らなくて良い言葉が日常語になってしまった。困ったことに、専門家と言われる人の中でも、それに対する解釈・評価の分かれるところがある。ということで何を信じて良いかわからないという声をよく聞きました。

それで、ここで話をするのは、私の個人的な感情ではなく、今の科学における到達点と、如何に現時点でわかっていないかということをおわかりいただければ、と思います。

それから先は、それぞれの方が、それぞれの環境の下で、生活されていく上で、どのように判断し、行動すれば良いか そういうできるだけ正しい判断材料を提供できれば・・・というのが私の願いです。



はじめに「原子力と放射線の基礎」について話されました。

放射能と放射線は混同されることがあります。放射能とは放射線を出す能力のこと。(電磁)放射線とは空気を電離する能力を持った電磁波または粒子線を言います。

放射線は次のような種類があり、それぞれ透過力が違います。

○アルファ (α) 線は、透過力が弱いので内部被ばくが問題に。

○ガンマ (γ) 線やエックス (X) 線は、透過力が強いので外部被ばくが問題に。

○ベータ (β) 線はその中間。

次に「日常生活と放射線量」「体内・食物中の自然放射性物質」「食品の放射性セシウムの基準」などについても話されました。放射線は原発事故前から日常生活の中に存在しているものです。

さらに、原子力発電のしくみについても説明されました。

次に「放射線による人体への影響」の中では、「放射線防護の考え方」を紹介されました。人体へ影響については、次の2つがあります。

○確定的影響(脱毛・白内障等・・・ガンや遺伝的影響が及ぶもの以外すべて)

しきい線量以下なら問題なし。
しきい線量を超えると急激に影響が大きくなります。

○確率的影響(ガン・白血病等・遺伝的影響の2つだけ)

自然発生率以下なら問題ないだろう。まだ解明されていないので「だろう」です。

低線量では身体に良いという説もあります。秋田・玉川温泉の岩盤浴がその例です。



とにかくわからないことが多いので、研究中です。

とりあえず、制限値は自然界から受ける量が2ミリシーベルトなので、1ミリシーベルトとしました。

「放射線によるガンの誘発」では、「影響は長期間にわたる、若い人ほど影響を受けやすい、女性特に妊婦の方には要注意」と語られました。

福島原発の現状と課題については、事故当時の経緯から紹介しました。

昨年（2011年12月）の政府による「冷温停止状態宣言」については「なんとか100℃以下を保っているだけで、綱渡り状態。宣言と出せる状況ではありません」と評価しました。

廃炉までの行程も紹介しました。

その上で、事故の教訓について、次の項目を挙げました。

○想定外は許されない

実は想定されていた。しかし、警告されていたにもかかわらず対応されていなかった。

○最悪の事態を想定して対応すること

「なんとななるだろう」「大丈夫だろう」では対応できない。だから後手後手になった。

○危機管理が徹底されず。

原発だけでなく日本全体に言える。初動の遅れが決定的ダメージになる。

○組織的に対応できる態勢を

組織的な連携、正確・迅速な情報の発信が必要。

高額な税金を投入して構築したシステムだったなのに、情報発信がなかったため、逃げた方向に放射性物質の雲が行った。ひどい話だ。

それで、今後の課題については、次の項目を挙げました。

○厳しい安全基準の策定と実施

○危機管理の徹底

○組織の改編（環境省内に原子力規制庁の設置）

○エネルギー政策の見直し

○汚染物の処理・処分

国がリーダーシップをとって進めること。国の対応は遅い。

高い線量が予測されるポイントについても説明しました。

○雨水がたまる所

○植物及びその根本（高い広葉樹の根本・コケ）

○雨水・泥・土がたまりやすいところ

低くなった地面・コンクリートと表土の境目及び割れ目

○微粒子が付着しやすい構造物

さびた鉄構造物・トタン屋根・麦わら葺き屋根

こうしたところでは要注意です。特にお子さんが土で遊んだ後は、シャワーを浴びるなどの対応をしてください。

福島県と都筑区の放射能と放射線量は次の通りです。

各地域の放射線量				
場所	日付	放射線量($\mu\text{Sv/h}$)	年間に換算(mSv/y)	
福島県	3月4日	1.03	5.42	>1.00
		0.99	5.21	>1.00
		1.27	6.68	>1.00
		1.23	6.47	>1.00
		0.51	2.68	>1.00
		0.47	2.47	>1.00
神奈川県	都筑区役所	0.09	0.47	<1.00
		0.05	0.26	<1.00
東京都	新宿区	0.05	0.26	<1.00
		0.01	0.05	<1.00
千葉県	柏市	0.50	2.63	>1.00
		0.46	2.42	>1.00

・上段: 自然放射線を含む 下段: 自然放射線を含まない

最後に本多教授は「正しく知って、その上で過度に敏感になる必要はないが、正しくこわがること」と話され、講演を締め括りました。

「できるだけわかりやすく」を心掛けて講演された本多教授の努力を感じ取ることができました。しかし、科学的知識がないとなかなか理解できない項目もありました。これは仕方ないことなのかもしれませんが、そう考えますと、私たちがなかなか理解できない原発が存在すること自体、問題ではないか、と考えることもできます。

本多教授は、国の対応等については厳しく指摘していましたが、東京電力に対する評価・考え方については、ほとんど語りませんでした。

また、科学的に解明されていないことがあるからでしょうが、曖昧に感じるところもありました。例えば、会場から「神奈川県では3,650人の避難者が生活していますが、この人たちは、いつになったら帰れるのか。それとも帰れないのか」という質問に対して、国が示した3段階の地域区分について説明しましたが、私たちが聞きたかったのは、本多教授の見解による「帰れるのか、帰れないのか」です。

私（山口）の個人的見解になりますが、「帰れない」と言わざるを得ません。なぜなら、本多教授が紹介されたように福島市役所では、0.99 マイクロシーベルト／hだからです。

本多教授は講演で「『大丈夫だろう』では対応できない」「最悪を想定して対応を」と話されました。そうであれば、現状では福島には戻ることができないことを明言すべきではないでしょうか。

除染すれば帰れるわけでもありません。

そもそも除染すれば線量が下がるわけではありません。今の除染方法は「まき散らす」と言う表現が適切かもしれません。除染とは、それだけ容易ではないのです。

神奈川県に3,650人の避難者が生活していることを初めて知りました。

3,650人とは大変な数字です。それだけ、今の日本では異常なことが起きているのです。

ところで、神奈川県の人口は、約900万人です。一方、私（山口）が住む山形県米沢市の人口は88,000人あまりです。そこに、約3800人の避難者が生活しています。約24人に1人が避難者という計算です。これは、戦後の混乱期を除き、前例のない非常事態です。

《講演2》

◎テーマ：ふくしまの農業再生へ向けた取り組み

◎講師：福島県天栄村産業振興課副課長 吉成邦市氏

◎講師プロフィール（司会者紹介）

昭和58年4月より天栄村役場に勤務。平成2年には福島県庁へ出向。

天栄村役場に帰ったあとの平成7年、地域おこしイベント“ウルトラクイズ in てんえい”を企画し、平成13年（2001年）までの7年間、開催しました。全国からの参加者は1500人を超えました。

その後、介護保険の立ち上げを行い、平成15年に産業振興課勤務となります。

平成19年に天栄村の米を日本一にするために、天栄米を企画し、天栄米食味コンテストを開催します。さらに、天栄米の栽培技術向上のため研究会を設立。翌年には漢方肥料による無農薬栽培に取り組みます。

平成20年からは全国米・食味鑑定分析コンクールで研究会のメンバーが日本一となります。総合部門で金賞を受賞しました。その後も毎年受賞することになります。平成21年には3人が日本一の金賞を獲得し、全国から注目されるようになります。それで全国からの注文への準備もしました。

その最中に、東日本大震災による原発事故によって、農作物の信用が失われてしまいます。本当に残念なタイミングになってしまったわけです。

それにもめげず、平成23年4月からは、天栄米栽培研究会事務局として放射性物質の抑制技術の確立に向けたを開始しました。「試せることは、すべてやる」を合言葉に農家の方々と一しょになって、ゼオライト・カリウムなどの試材を試した結果、平成24年の天栄米は、300検体すべて未検出となりました。

これからも安全・安心なお米を作るために、現在も研究を重ねておられますが、福島農業再生に向けた精魂込めたお米作りの取り組みをご紹介します。

司会者による講師のプロフィール紹介ですが、3分5秒もかかりました。長いです。

内容も講師自身が紹介すべきことまで語られています。また、文章的にもおかしい部分がいくつかありました。ここでは、それらの部分については、できる限り修正して、文字起こしを行っております。

◎講演趣旨（チラシ記載）

原発事故により農産物の信頼が失われつつある今日。「試せることは、すべてやる」を合言葉に安心・安全な日本のおいしい米作りに精魂込める「天栄米」の取り組みについて報告します。

◎講演内容

講演では、はじめにドキュメンタリー映画“米の放射能汚染ゼロへの挑戦 ～2011 年 福島県天栄村の記録～”（企画：天栄米栽培研究会 制作：桜映画社）が上映されました。

映画では、放射能汚染対策の3大物質と言われるカリウム・ゼオライト・プルシアンブルーを使用することについての葛藤を中心に紹介していました。使用することによる食味の低下、コストとのせめぎ合いがあったからです。しかし、「できることはなんでもやろう」ということで、農家の人たちは苦渋の決断に迫られながらも協力します。こうして、未検出を達成したのです。

映画からも、吉成さんと研究会のメンバー（農家）が一体となって取り組んでいる様子をうかがい知ることができました。

この結果を基に、吉成さんは2012年の取り組み方を計画します。また、今年の2月には里山の源流水を採取し、水の放射線汚水状況を調べるなど、現在も取り組みは続いています。

映画上映では、パソコンから音声を引き出すことができず、約10分間のロスタイムが生じてしまいました。さすがに10分間は長く、会場からは「生の声を聞かせてください」という声も挙がりました。しかし、映画は桜映画社制作です。映画を制作した原村監督は、講演の模様を、ムービーカメラを回しながら取材しています。ですから、どうしても上映したいわけです。

しばらく時間はかかりましたが、会場にいた人の気転・協力で音声ラインを引くことができ、音声が届くようになりました。これも“つづき楽校”ならではのことで。

映画は、3大物質を紹介しながら、天栄村というより吉成さんや研究会の取り組みを淡々と描いていました。特に凝ったカメラワークをしているわけでもなく、好感を持つことができる作り方です。ナレーションは“プロジェクトX”を彷彿とさせる語り口です。観た人からは「難しいことをとてもわかりやすく伝えており、とても素晴らしいです」という声が挙がっていました。

約27分間の上映のあとは、吉成さんによる講演です。その概要は次のとおりです。

3月11日当時の状況。震度6弱の天栄村でも建物の倒壊など甚大な被害。

原発事故がわかったのは3月17日。すでに土壌は汚染されていた。情報伝達の遅さ。

3月11日をきっかけにした気持ちの変化。



郷土への愛着の深まり。使命感の高まり。

汚染された地域での安全な米は、自分たちの力で作り上げていく。

安心・安全を届けるための決意。村での測定器の購入。しかし、なかなか購入できなかった。品薄と価格の問題で。だが、すべてはデータで裏付けされる。やったことが開示できることが大切。

取り組んだ結果、福島県の予備調査・本調査（いずれも最もセシウムの高いところ・ピンポイントで調査）とも未検出。村での検査でも 300 検体すべて未検出。

ところで、この時の予備調査・本調査では、ほかの福島県の地域でも未検出。1年間農家の人に「あれやれ、これやれ」と言い続けた吉成さんは、苦勞させたことについて謝りました。ところが、12月になると、ほかに地域で検出が相次ぎます。それで農家の人たちに納得してもらったという経緯がある。

今年（2012年）は、稲わらの検査を行う。またゼオライトも手配済。3月12日より配布。とにかく、できることは前倒しで取り組んだ。

もう一度、安心・安全で、しかも日本一美味しい米作りを目指す。

環境王国天栄村における今後の生活・・・ここから移住することは考えない。それより、安心・安全な土地・作物・暮らしを取り戻す。天栄村が大好きな人たちが、もう一度訪れることができる村を取り戻す。

今年は、米以外のシイタケなど農産物にも展開。

これからも安心・安全で美味しい米作りに取り組みます。そして、この美しい土地で生きていくために、必ず「フクシマ」から「福島」へ戻ります。



私が特に評価したいのは、行政と農家の人の間に、信頼関係が出来上がっていたことです。

また、吉成さんの仕掛け方の素晴らしさにも感心しました。それは、農家のやる気を引き出す仕掛け方だったのです。

そこで思うのは、『フクシマ』ではなく『天栄村』として、これからも活動を続けるべきではないか、ということです。なぜなら、今の福島県は、地域によって、あまりにも置かれた状況が違います。また、大震災&原発事故前は『天栄米』というブランドを確立しました。

『フクシマ』を背負い込まず、自分たちの地域『天栄村』としての取り組みを大切にしてほしいと感じました。

《講演3》

◎テーマ：外遊びができない福島の子ども達を救え～猪苗代湖ではじまった試み

◎講師：NPO法人こどもの森ネットワーク 理事長 橋口直幸氏

◎講師プロフィール（司会者紹介）

アウトドア雑誌のライター時、取材でよく訪れていた磐梯山が気に入り、1994年猪苗代へ移住。自然を守るためには一方通行で発信するのではなく、長期的にメッセージを伝えることが大切、という考え方で方向転換し、ネイチャーガイドとして活動を始めます。ガイド活動が続けている内にもっと大事なことが子供達を導く事だと言う事に思い至ります。

幼い内に自然を体験できる場を、とNPO法人「こどもの森ネットワーク」を設立。2000年から磐梯高原をフィールドに森の楽校フォレストランドを開催。さまざまな自然体験プログラムを開催してきました。

原発事故後、先行きが見えない不安を橋口さん自身も感じましたが、会津の人たちは我慢強いのであまり口に出さない。Iターンの自分だからこそ出来る事があると福島に残り、外遊びが出来ない福島の子供達のために外遊び支援を続けています。

3月までに全35回・延べ1500人を、協働体を中心にした県内の自然体験施設数カ所に招く計画が進行中です。

◎講演内容

ここに来た目的は、外遊びができない福島の子どもたちの現状を知ってもらうため。

最初に子どもたちの笑顔の写真を出したのは、大変な状況でも福島の子どもたちは笑顔でがんばっていることを伝えるため。

福島の子どもたちは声を出さなくなっている。それを代弁するのが自分。



私（橋口氏）は、大震災・原発事故前から子どもたちの外遊びには力を入れていた。それは、10年前から最近の子どもは外で遊ばないと感じていたから。それで、平成17年、ドイツの森の幼稚園を見てきた。そこで、人間教育を深めていくためには幼児期が大事だと思い立ち、環境教育から幼児教育へ目覚めた。それは平和教育でもある。今の活動に力を入れているのは、福島の子どもたちに、日本の未来・世界の未来に重ねてみてしまうから。これは、福島だけの課題ではない。だから、みんなが、他人事から自分事になれば良いと思う。

福島県は広い。すでに、会津は他人事になっている。同じ福島県内でも、情報が伝わっていないから。

昨年秋（2011年10月28日～30日）、新潟で“森のようちえん全国交流フォーラム in 新潟”が開催され、幼児教育に関わる300人が参加。そこに参加していた方がこの会場にもいます。私がここにいるのは、そこでの出会いがあったから。

私が行っている外遊び支援事業については、参加者1500人中、子ども1100人。引率の大人400人。これで今年度（平成23年度）は計画通り終わろうとしている。しかし、子ども1100人は、

外遊びができない子どものごく一部。外遊びができない子どもの人数が数値になっていない（調査されていない）ことが問題。

線量も数値にすることが重要。だから私は常に測定器を持参。それで、雪の遮へい効果で線量は低くなることがわかった。だから、猪苗代に来た子どもたちは笑顔を取り戻して遊ぶ。

福島市や郡山市の子どもたちは0.8とか1.0マイクロシーベルト／hに住んでいる。子どもたちがそこに住み続けるにはわけがある。福島では離婚が増えている。

保育園では除染で0.3マイクロシーベルト／hに下がるも、外遊びさせるか、悩ましい数値。

私（橋口氏）は0.1から高くても0.2以下のところで活動計画を立てている。それは多くの人に聞いたから。0.5ではみんな黙る。除染で0.3に下げても、スポット的に下げたのでは再び高くなる。面的な除染が必要。でも除染はやり続けること。

しかし、除染は進めなければならないが、その間も子どもは大きくなる。幼児期に外遊びを放置すると、どうなるか。

幼児期の遊びで人生のほとんどを学ぶ。福島では、幼児期の遊びが欠落した数万人の子どもたちが生まれようとしている。

ある保育園の人に聞いた言葉がショックだった。子どもたち（園児）に「外で遊びたいですか」と聞いたら、子どもたちは黙っていた。それでも昨年（2011年）は遊びたい素振りもあったが、1年も経つと外遊びしないことに慣れてきた。子どもたちも平気になりつつある。衝撃だ。

私の外遊び支援事業は、内閣府の“新しい公共”という助成金。国も評価してくれた活動。

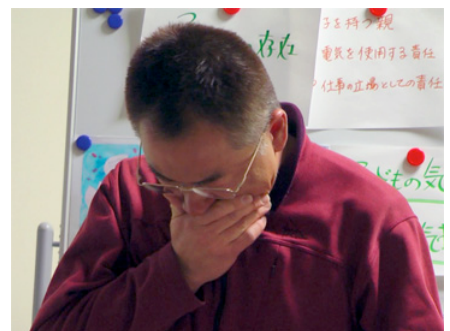
保育園関係に広報したら2週間でバスが満杯になった。ニーズはある。

しかし、こちらが手を差し伸べる前に、支援が行き届く前に、半ばあきらめ始めた子が出始めていることが問題。

はじめは、バスを出すので選んでください、という受け身の活動だった。

幼児期に外遊びを奪われてしまったロストジェネレーションの子どもたちがどういう成長をするのかというのは、私は関わってしまったので、イヤだけど、見ることになるが、私は今必死にそのジェネレーションをつくらないために、がんばっている。

本当はひとりも出してはいけないんですよ・・・（絶句）



私はいつもけしてひとりではないと思っているが、相手があまりにも大きいので、たまに抱えきれないことがある。

ここに貼り出したのは“つなぐ人フォーラム”（2012年2月25日～27日、山梨県清里高原にて開催）の分科会で、きょうのように現状を話した上で、「福島の子どもたちが夢を描くことができるような知恵と力を出してください」と言ったら出てきたもの。課題出しをしてもらったもの。

その中で出された「被災地の現状を知りたく



て参加。知ること→風評・風化させないために」はありがたい。自分は観光業。3・11後、本当に悩み、ひどい頭痛にも襲われた。

だから、子どもたちの笑顔から元気をもらった。子どもたちの前では泣かない。その反動がここに出たのかな。

子どもたちから笑顔が奪われるとは平和でないこと。子どもたちから外遊びを奪った直近の例は第二次世界大戦。子どもたちが外遊びできないとは非日常。それが福島では日常になっているという矛盾が起きている。

子どもたちの笑顔の裏に隠された心の中・気持ちにどこまで寄り添えるかをやろうとしているが、デリケートで入っていくのは難しい。でも、関わることで感じることはできる。

春、雪融けが進むことで、新たなホットスポットや線量が高くなることが心配。常に線量は監視する必要あり。

ニーズも変化。昨年までは「外遊びさせないで」という親御さんが多かったが、今年に入って逆転した。

福島市・郡山市などの悩ましい地域では、外遊びすれば『低線量被ばく』する。しかし、『低線量被ばく』のリスクを防ぐために、外遊びさせないと、守りすぎることによる心理的ストレスからの健康被害がすでに出ている。例えば、転びやすい。疲れやすい。食べないので成長のペースが落ちている。イライラする。ケンカしやすい。

守ることの安全性と、守りすぎることによる失うことへのデメリットの悩ましさ。

私は、福島でも線量が低くなったところは安心と思うが、その基準がないため、意見が分かれてしまい、おかあさん同士で仲悪くなることも。

守りすぎて、まったく外に出さないと、子どもはおかしくなる。その健康被害の方が『低線量被ばく』より高いのではないかという説もある。私はその考えだ。

それは、この活動にかかわる子どもたちを見るとわかる。ほとんどの保育園の園長も同様に感じている。それが（私の活動のひとつ）の評価。

新年度（平成24年度）はバス80台。1台30人で計算。でも、これを必要としている子どもたちは数万人。

新年度（平成24年度）までが勝負。1年でも子どもたちにとっては長いから、福島が2年目迄に（子どもたちへ外遊びを）保障できる社会的制度を確立できるかだ。3～4年もかけるわけにはいかない。本当は1000台必要。それで世界に出て（国連にて）訴える

これは5億円でできること。（本多教授が講演で紹介した）数百億かけてうまくいかなかったシステムを考えると、子どもたちのための5億円は安い。首相にも訴える。

福島に来て、福島の子どもたちと関わってほしい。私は、命尽きるまで、福島でがんばるつもり。どうか皆さんの力を貸してほしいと思う。これからも、福島の子どもたちをよろしく願いします。

講演の途中、感極まって絶句までされた橋口さん。それだけ橋口さんの福島の子どもたちへの思い入れを感じることができました。

講演内容は、猪苗代でも取り組み内容（支援活動の紹介）ではなく、その背景となった福島の子どもたちの現状紹介、それに対する橋口さんの思いが中心になりました。

話の流れとしては、時々、話が飛んだり・迂回したりして、取り留めなさを感じることもありましたが、大事なのは、活動の背景であり、橋口さんの思いでありますので、講演としては、とても良かったと思います。

ただ、絶句された背景には、橋口さんの「福島のすべての子どもたちに手を差し伸べたい」という思いがあるからかと思いますが、いくら橋口さんが力のある人だとしても、それは現実的には困難なことで、そこまで考えてしまうと、支援者自身がつぶれてしまいます。

現状を見ることは大切ですが、支援にあたっては、自分ができることをしっかり見極めることです。そうでなければ、活動は長続きしません。

そういう意味で、取り留めなさを感じる講演になってしまったのは、思いが先行しているからという見方もできます。子どもたちへの思い入れは大切ですが、思い入れがすぎますと、自分を見失います。

「外遊び支援事業は、内閣府の“新しい公共”という助成金」という説明がありましたが、“新しい公共”は単なる助成金事業ではありません。地域に“新しい公共”を育成する・根付かせるという使命があります。

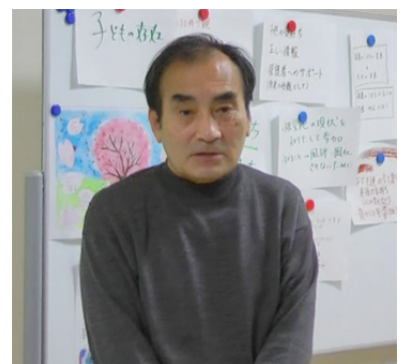
この点からも、活動に対するマネージメントが求められます。ここで言うマネージメントとは、的確な運営を行うだけではありません。人に対するマネージメントも含みます。支援者自身がつぶれないためにも、まずは橋口さん自身のマネージメントが必要に感じました。

◎主催者挨拶・・・つづき楽校副代表：松村さんの挨拶

きょうは天候が悪い中、たくさん集まっていただきました。途中不手際もありご迷惑をおかけしました。

私たちの運動は、これからずっと続けなければいけない。特に放射線の問題は10年・20年・30年という年数で、しかも終わらない。原爆の被害は今でも継続しているわけですし、いろんな問題が出てくると思います。私たちが「わすれない」と書いたのは福島のことについては長い時間忘れないで、記憶にとどめ、支援というより、一緒になって考えていく必要があるのだろうと思っています。

皆さんからは、これからもご協力いただければと思っています。
ありがとうございました。



講演会&座談会ということでしたが、時間の関係で、“あいたい・コミュニティールーム”のプログラムは、午後4時35分に終了しました。

それで座談会は、場所を変えて、ショッピングセンター・Yotsubako（ヨツバコ）の8階にある Muu Muu Diner（ハワイアンカフェ&レストラン）にて行いました。



ここでは、座談会というよりコーヒーなどをいただきながら、吉成さんや橋口さん、それに桜映画の関係者を囲んでの談義となりました。また、参加者同士が名刺交換される場面も見られました。

そのあと、午後5時45分からは“めーぷる保育園”（子育て子育て支援センターぽっぽ）にて交流会・懇親会を開き、1日を振り返りながら、さらに親睦を深めていました。

場所を提供された“めーぷる保育園”は“NPO法人めーぷるここ”が運営する保育園で「みんなちがってみんないい 地域で支えあう『子育て』の輪」をモットーに、自然の中で思いっきり遊んで豊かな感性を育みます。一時保育として“子育て子育て支援センターぽっぽ”も運営しています。



ここでは、少し時間をいただき、私（山口）からは、大勢の福島からの避難者を受け入れている山形県米沢市の現状について、ご紹介しました。また、天栄村と横浜・都筑区がつながるきっかけとなった Yasuda さんからは、これまでも経緯を紹介してくださいました。（この内容は、この報告でも先に紹介しています）

これで、1日目のすべての行事が終了しました。



2012 年 3 月 11 日（日曜日）横浜の天気：曇りのち曇り時々晴れのち晴れ

【つづき楽校：あったか復興支援 わすれない 3.11：2 日目】

“つづき楽校：あったか復興支援 わすれない 3.11”の2日目、“復興支援ひろば”は、センター北“しばふ広場”（横浜市都筑区中川中央1丁目）にて開かれました。

まず、心配されたお天気は見事に回復しました。朝方は雲に覆われていたものの、雨の心配はありません。時間の経過と共に青空が広がります。これも『図子パワー』だとか！

私がお会場に到着したのは、午前10時前です。横浜市営地下鉄・センター北駅を降りて、北に向かいますと、目の前が“しばふ広場”です。

“復興支援ひろば”は午前11時スタートですが、すでに大勢の人たちが準備に取り掛かっていました。平成22年度・市民活動支援講座“つづき楽校”を実際に運営した中島さん・田中さんとも再会です。まんまるプレイパークの子どもたちとは1月の福島県会津坂下町以来の再会です。天栄村の吉成さんたちも準備の真っ最中です。桜映画社の原村監督と細矢さんも、すでにカメラを手にしながら取材を始めていました。



午前10時には、図子さんを中心に、スタッフ・ミーティングが行われました。

私は、準備の様子を拝見しながら、おみせを確認していきます。全部のおみせを取材することができるかな～・・・

その間、私もちょっとだけですが、準備のお手伝いです。パフォーマンス舞台の後方にパネルストリートを設置するお手伝いです。このパネルは“芽吹きの家”の活動によって、被災地から届けられたメッセージなどを紹介するものです。



一部のおみせでは、準備の合間をみて、おみせの人たちにインタビューしました。インタビューについては、このあとのおみせ紹介の中でお伝えします。

ただ、復興カレーのおみせでは、つづき楽校・スタッフの方としばらく談義しました。

市民活動支援講座“つづき楽校”には参加できませんでしたが、今や“つづき楽校”の一員である方は、天栄米の事を聞きますと、昨年5月には、“つづき楽校”のメンバーでは誰よりも早く、天栄村に入っています。それもお孫さんを連れて・・・。

家族にはひんしゅくを買いますが、お孫さんは大喜び。土いじりはできましたし、クローバー

で輪っかも作りました。「5月が田植えなら、稲刈りも」となり、秋にも天栄村を訪れます。やはりお孫さんを連れて・・・。

「要は気持ちの問題」と言います。これもひとつの考え方であります。

前日の本多教授が言うように、怖がるべき時には怖がることですが、過剰に怖がることもありません。その線引きは人によって様々です。大切なのは、それぞれの人が納得して線引きすることです。

それから、一時的に放射線量の高いところに居る事と、放射線量の高いところに日常として長い間生活する事では、まったく異なります。自主的に避難されている人たちを最も多く受け入れている山形県（米沢市）に住む私としては、それだけはわかってほしいと思います。

要は、自分の行動は、自分で責任を持つことです。よく聞くと「・・・して、将来・・・になったら、誰が責任をとるの？」という言葉です。これは「誰が責任をとるの？」ではなく「自分自身が責任をとる」ことなのです。

「誰が責任をとるの？」という人は、過敏になりすぎて、あるいは人に責任を転嫁しないと、結局は「何もできない人」になります。これでは前には進みません。世の中も変わりません。

そういう意味でも、今回の2日間にわたる“つづき楽校”の取り組みは、“つづき楽校”としての意志を示し、実践につなげたのです。素晴らしいことです。

◆オープニング

午前11時、“復興支援ひろば”の開会です。

司会は“つづき楽校”のItakuraさんです。

はじめに、図子さんが「きょうは皆さんの気持ちも通じて、雨がやんで薄日が差すような気配になって、とても嬉しいです。思いがきっと東北の地にも届くことを願って、きょう“あったか復興支援わすれない3・11”を今から始めます。よろしくお願いいたします」と挨拶。



続いて、来賓として、横浜市都筑区社会福祉協議会の山下事務局次長が、次のように挨拶されました。

東日本大震災で被害に遭われた方に心よりお見舞い申し上げます。

都筑区の地域福祉保健計画の支え合いの都筑区づくりのためのあい基金という助成金で支援をさせていただいたご縁で、招かれたことに、大変ありがたく思っています。日頃からのつながりづくりというのが、災害や非常の時など日常と違ったことが起こった時に大切なことだと思っています。都筑区社会福祉協議会も日常と違った時に助け合える地域づくりのために、皆様といっしょに努力してまいりますので、これからも支援をよろしくお願いいたします。



おみせをやっている人たちは、都筑区のつながりづくりにがんばっている方々かと思いますが、お客さんになっている方々も、おみせの方々も、ひと言ずつ声を掛け合って、言葉を交わし合って、これからにつなげていただきたいと思います。

皆様といっしょに東北を応援していきたいと思います。本日はありがとうございました。

司会の Itakura さんから「あの時から私たちができることは何かあるだろうか、やらなくてはならないことは何かないだろうか、その思いで、この都筑区から復興支援を考えていこうことで、本日この会をやっていくことに決定しました」という紹介があった後、パフォーマンス・プログラムが始まりました。

この日の“復興支援ひろば”では、しばふ広場北側に設けられたパフォーマンス舞台でのパフォーマンスのおみせと屋台のよるおみせが出されました。

それでは、それぞれのおみせをご紹介しますながら、“復興支援ひろば”の模様をお伝えしていきます。

▼本部：お手紙プロジェクト



しばふ広場の南側（センター北駅側）に設けられた本部で開かれているのが被災地の人たちに送る“お手紙プロジェクト”です。これは、100円で「想いを募金にしよう！メッセージにして東北に届けてみませんか？」というプロジェクトです。募金は日本赤十字社・東日本大震災義援金として送られます。



スタッフの皆さんに感想を聞きますと「心がこもったお手紙ばかりでした」と話されました。



▼復興紹介ブース：天栄米ほか天栄村紹介のおみせ



あのブランド米・天栄米をはじめ天栄村（の取り組み）のことがわかるおみせです。熱心に尋ねるお客さんもいて、吉成さんも真剣に対応しています。



▼パフォーマンス：横浜Z y Z y B（ヨコハマジージービー）

プログラムでは、富岡秀二さんによる東北地方民謡となっていましたが、この日は双子のお兄さんと“横浜Z y Z y B”としてのパフォーマンスとなりました。



生きがいと元気をリードしているという横浜市青葉区在住の富岡さんは、2009年、開港150周年記念曲“ヨコハマ音頭”作詞作曲したことで知られる存在となりました。同年、双子のである兄と“横浜Zy Zy B”（ヨコハマジージービー）を結成し、CDデビューを果たしました。2010年には神奈川県健康生きがいづくりアドバイザーに参画し、主に中高年を対象にしたイベントを計画して健康と生きがいに取り組むと共に“唄って健康教室”を主宰しています。

この日は、“常磐炭坑節”や“相馬盆歌”などを披露されました。

▼手づくり品&ゲーム：どんぶらこの会



宮城県出身で、山形の短大にも通学していたという方にインタビューしました。

“みんなともだちプロジェクト”の横浜支部として設立したのが“どんぶらこの会”です。

“みんなともだちプロジェクト”は、絵本作家（あそびうた作家）の中川ひろたかさんが始めたものです。

被災地に支援したい。でも義援金の使われ方は不透明、支援物資の偏りもひどい。確実に届けるにはどうすれば良いか。

中川さんには、東北にともだち数人がいます。そのともだちのともだちには被災して大変な目に遭った人がいます。そこで、被災地近くに住んでいるともだちを《届けるともだち》とします。全国の《贈るともだち》から集まった支援金を《集めるともだち》を通して《届けるともだち》に送り、《届けるともだち》は《困っているともだち》に届けます。現地では《届けるともだち》は《困っているともだち》からの声を聞きます。そして、《困っているともだち》が欲しいと思う物資にして届けることもできます。

《贈るともだち》→《集めるともだち》→《届けるともだち》→《困っているともだち》
顔が見える、ともだちとしてつながっている支援活動です。

きょうは届けた先のともだちからのお便りも置いています。お便りによりますと、相馬のおともだちはガイガーカウンターを買いました。石巻のおともだちは、家を流されたともだちに生活再建のためにお金を届けました。

要らないものを贈ることをしないために、困っているともだちから、現在の現地の状況を聞いています。



横浜支部では、メーリングに登録している人は60人ほどです。同じ幼稚園の現役のママたちと卒業生のママたちでやっています。



きょうは、手作りのお弁当袋、小物アクセサリ、古着などを売っています。また、子どもたちが遊べるように、パチンコゲームもできます。

▼手作りの科学工作：古瀬さん



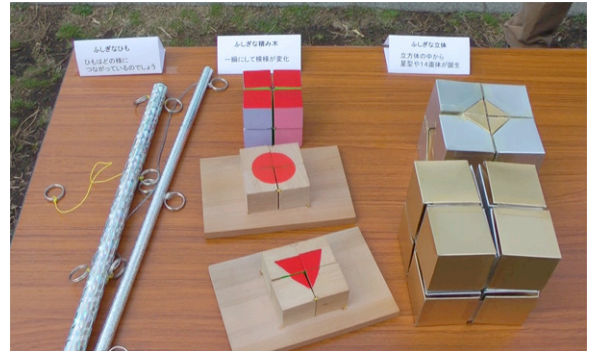
横浜市に住んでいるという古瀬さんのおみせです。古瀬さんのお話です。

手作りの科学工作のおみせです。不思議な動きをする工作を持ってきました。市販で売っているようなものでなく、手作りしました。それを見てもらいたいために持って来ました。

お年寄りが集まるサークルに持っていき、さわってもらい、ちょっと不思議だな～という思いを感じていただきます。実践もします。楽しんでもらうことで、ケアにもつながります。

2年くらいから始めました。定年退職をした後、作りました。

子どもたちも喜んでくれます。



科学には前から興味がありました。きょうここに持ってきたのは全体の1／5です。家には、ラジコン、空を飛ぶもの、空中に浮かぶものなど、たくさんあります。

▼防災用手作り品：すずらん

3人の女性によるおみせです。図子さんも入ってカメラに収まりました。



“すずらん”は、ボランティアで手作り（手芸・編み物）の小物を教えている3人によるグループです。元々は“おもちゃ図書館”で布の絵本や布のおもちゃを作っている団体で活動していましたが、今回“すずらん”として3人で活動を始めました。そこには、宮城県沖地震の時、多くの人に助けられた体験から、恩返しの気持ちで少しでもお役に立ちたい、という思いがあります。

きょうは、防災用手作り品を提供しています。また、図子さんが被災地に行った時に預かって小物（右の写真）も、ここで販売します。

これからも、被災地応援を、いろんな形でやっていきます。



◆ゴミ分別コーナー

横浜市の環境事業推進員という組織があるそうです。その内、都筑区の連絡協議会の会長は、私のインタビューに答えてくださったアベさんです。アベさんのお話です。

ここでは、ゴミの分別と、防災支援ということで防災に関する福祉の看板をひとつ掲げます。

ゴミの分別では、今回ゴミのボックスを持ってきましたので、出たゴミを持ってきてもらい、私たちがゴミの分別指導を行います。都筑区には200人の仲間がいますので、それぞれ、おまつりやイベントがあると、必ずやります。



やはり、経費削減で少しでもゴミを資源化しようという目的で活動している団体です。



▼コーヒー&お菓子：アスタ荏田



アスタ荏田は、毎月1回“つづき楽校”が開かれている多目的ホール“えだきんパーク”内にある障がいを持つ人たちの作業所で、“えだきんパーク”では喫茶の営業やお菓子を製造・販売しています。都筑区役所のホールでも販売しています。インタビューしました。

この日は、カステラやクッキーなどの手作りお菓子と美味しいコーヒーを販売しています。手作りお菓子では、アレルギーを持つ人のために、卵入りと卵なしの2種類に分けています。また、マドレーヌ付きコーヒーを250円で販売し、その内40円を復興支援金としました。

▼都筑まもる君焼き：酒と米のうちの

パフォーマンス舞台脇のおみせでは“都筑まもる君焼き”を売っています。ナニそれ？早速インタビューしてみましょう・・・と思ったら、女性の方が元気良く・・・

おはようございます。“うちの”です。“都筑まもる君焼き”を行っております。交通安全・都筑区民のシンボル、ゴリラの“まもる君”の形をおこしました『たい焼き』です。中身はあんこです。

・・・と一気に紹介されました。さすがは酒屋の奥さんです。さらに聞きますと・・・

たい焼きは、主人のアイディアです。たい焼きの図案は区民の方に考えてもらいました。モチーフは“都筑まもる君焼き”ですが、絵にしてくださったのは区民の皆さんです。

なんだか、まだよくわかりませんね?? そもそも“都筑まもる君”とはなんでしょう。

“都筑まもる君”とは、交通安全協会の大きなモニュメントです。この近くの交差点の脇に立っています。都筑区の交通安全の象徴として立っています。その“都筑まもる君”を区民の親しいものにしたいということで、たい焼きにおこしました。



ようやくご主人が戻ってきました。以下はご主人の話です。

“都筑まもる君”は都筑区の子どもたちもよく知っていますし、交通安全にも寄与しています。

あと、野生のゴリラが世界的に絶滅の危機に貧していますので、野生のゴリラの保護にも役立たいという2つの意味合いを持っています。

店（酒屋）では“都筑まもる君焼き”はやっていません。都筑区での商店街イベントや各地のイベントにて、毎月のように出しています。それで“都筑まもる君焼き”は、だいぶ浸透してきました。



昨年（2011 年）のゴールデンウィークには、宮城県女川町の『復興市』（女川町での震災後、最初の復興の市場）にて出店し、被災地の皆さんに食べてもらいました。その日はまだまだ寒かったので、あったかいたい焼きに喜んでもらいました。

この日は、被災地で振る舞った“都筑まもる君焼き”を都筑の皆さんにも食べていただき、売上は義援金としました。

“都筑まもる君”について、私は後日さらに調べましたので、ご紹介します。

“都筑まもる君”の大きさは、高さ7m・幅4mです。デカイです。重さは1tもあります。ここでは、写真でご紹介できないのが残念ですが、右手を高く振りかざし、口を大きくあけて、怖そうな表情をしています。ちょっとビビってしまいます。これが、歴史博物館脇交差点（会場のしばふ広場からは南へ約500メートル）の北東側角にそびえ立っているのです。知らない人はビ

ツクリです。

平成8年生まれで、当初は保土ヶ谷バイパス沿いにあった“恐竜の森”にて人気となっていた巨大ゴリラでした。その後、都筑交通安全協会が譲り受けますが、巨体がゆえに、少なくとも2回引っ越しており、現在の場所に落ち着いたのは平成17年です。“都筑まもる君”という名前は一般公募により決まりました。

インターネットで写真を見ることができますし、詳しいことも調べることができます。

▼風車&チョコフォンデュ：まんまるプレイパーク



まんまるプレイパークが出したのは、竹の風車を作ったり・買ったりできるおみせです。



また、まんまるキッズによるチョコフォンデュ（チョコ・パン・マシュマロ・パインアップルを使ったお菓子）も販売しています。





まんまるプレイパークでは、私（山口）のコーディネートにより、昨年（2011 年）秋から、西東京市・会津（会津坂下町）、それに山形の子どもたちとの交流が続いています。

この内、山形（鶴岡市湯野浜温泉）の子どもたちとは文通による交流です。



また、この1月には、西東京の子どもたちといっしょに会津坂下町を訪問し、会津坂下のお祭りに参加したり、雪遊びをしたりして、さらに交流を深めました。そして、3月27日・28日には、西東京と会津坂下町の子どもたちが“まんまるプレイパーク”に来てもらうことになっています。この日の売上は、その交流事業のために役立てます。

（右の写真は、桜映画社の原村監督とまんまるプレイパーク代表の西田さんです）



▼カブト：わらしべ長者プロジェクト



都筑の若者たちが中心になって立ち上げたのが“わらしべ長者プロジェクト”です。“すぎなみ大人塾”でお馴染み・川上さんもメンバーです。コンセプトは・・・

もし会社に頼らず働き稼げたら、私たちのライフスタイルが少し変わる気がしませんか？
そこで立ち上がったのが“わらしべ長者プロジェクト”です。「自分の持ち味」と「偶然の出会い」で新たな「仕事づくり」です。

これこそが“だがしや楽校”から派生したプロジェクトです。

この日は“おりがみカフェ ～メッセージボックスを作ろう～”というおみせです。コーヒー・紅茶・ココアが100円でいただくことができます。

おやおや、川上さんが大きな声でメッセージを発しています。

私たちは福島に折り紙でカブトを作って届けています。これからこの巨大な紙で大きなカブトを作りたいと思います。



↑ 新聞紙をつなぎ合わせて大きな紙にして、カブト作りの始まり



↑ 子どもと大人の協働作業で「ああでもない、こうでもない」と言いながら折ります。



↑ そして、ついに出来上がりました
このままの格好で、会場内を練り歩きました。

▼紙飛行機&割り箸鉄砲：つづきっこまつりこども企画委員会



子どもたちで作っているおまつりを“つづきっこまつり”と言います。今年（2012年）は6月24日に開催する予定です。その“つづきっこまつり”の運営委員をやっている子たちをこども企画委員会と言います。インタビューしました。



こども企画委員会は、普段からイベントがある時には呼ばれて、子どものための模擬店をやったりしています。小学生から中学生までの子どもたちです。

つづきっこまつりの概要は

◎こどものこどもによるこどものためのおまつり

第17回つづきっこまつり

◎笑いで日本・世界のこどもたちを元気にしよう！

小さな力も大きな力に

東日本大震災で被災したこどもたちにエールを送り支援しよう！

◎開催日：2012年6月24日

◎場 所：都筑区役所1階区民ホール&駐車場側通路



“つづきっこまつり”でも震災のことはやりますが、例年“つづきっこまつり”での収益は、WFP（国連世界食糧計画）に寄付しています。世界には震災だけでなく、いろんな事で困っている子どもたちがいます。当日は高校生のOBの子たちも来てくれます。

きょうは、紙飛行機を作ったり的当てする遊びと、割り箸鉄砲作りのおみせ（模擬店）です。割り箸鉄砲作りの指導も子どもたちが行います。

“つづきっこまつり”では、子どもたちによる触れ合いが、子どもたち同士で出来れば良いな～と思っています。

▼ハガキでアート：つづき区民交流協会（フレンド工房）

“つくってあそぼうコーナー”を巡っていると、男性の方から「東戸塚の小学校でお会いしましたよね」と言われてしまいます。思いがけない声がけに、一瞬ビックリしましたが、すぐに思い出しました。

昨年（2011年）12月10日、横浜市立川上小学校にて開かれた“とつかのおもちゃ箱・だがしや楽校”にもおみせを出していた“フレンド工房”の白岩秀勝さんとの再会だったのです。



“とつかのおもちゃ箱”では“写真入りロケットキーホルダー”のおみせでしたが、この日は“ハガキでアート”のおみせです。



横浜にはいろんな市民活動・ボランティア組織があり、ネットワークができています。白岩さんは“フレンド工房”として（市民活動支援センターやボランティアセンターに）登録しています。白岩さんの話です。



きょうは“つづき区民交流協会”への協力として参加しています。特定非営利活動法人（NPO法人）“つづき区民交流協会”は、都筑区からの委託で、地区センター・子どもログハウス（鴨

池公園：まんまる広場の近くにあります）・コミュニティハウスなどを管理している団体です。

私（白岩さん＝フレンド工房）は、子どもたちが喜ぶことであれば、横浜ならどこへでも行って参加します。都筑区では、市民活動センターやログハウスなどでのイベントなどがありますと、参加しています。戸塚では、川上小学校“はまっ子ふれあいスクール”に週1回は参加しています。



きょうは、小学5年生の女の子さんが、フレンド工房のジュニアリーダーとして参加しています。このように、フレンド工房は、子どもさんも一緒になって運営に参加しています。

きょうは河口湖自然学校（昨年8月、被災地の子どもたちを招いてのイベントを開催した時にも“フレンド工房”として参加）でもイベントありましたが、地元横浜での復興支援イベントを優先することにして、こちらに参加しました。



▼折り紙&カゴづくり：つづき区民交流協会

隣りは折り紙のおみせです。こちらも“つづき区民交流協会”によるおみせです。



テディーベアとコマを折っています。折り方は、折り紙同好会から教えてもらったものを披露しています。

つづき区民交流協会としては、先にご紹介した“フレンド工房”の“ハガキでアート”と“折り紙”“カゴづくり”、それに受付では“つづき区民交流協会”を紹介する広報コーナーになっています。



▼パフォーマンス：ハワイアン＆フラダンス

当初のプログラムにはなかったハワイアン＆フラダンスのパフォーマンスです。この日はやや肌寒かったのですが、暖かな雰囲気になってきました。



センター北駅の近くにある教室(ハラウナーレイオーホク)でレッスンをしているそうです。生徒さんは子どもから大人まで約 20 人。後ろでウクレレを弾きながら唄っている方が先生で、私のインタビューに「横浜生まれです。私は、ずっとハワイアンの勉強をしていますので、それを日本のみんなに伝えるために、教室を開きました。ハワイアンのCDも出ています」と答えてくださいました。パフォーマンスされた方は「楽しいので、やっています」。

仲町台の地区センター（運営：つづき区民交流協会）などでも披露しています。

▼餅つき：ライフ＆シニアハウス港北



会場の一角では、餅つきが始まりました。飛び入りで、お子さんも餅つきです。



ライフ＆シニアハウス港北は(株)生活科学運営が経営している有料老人ホームです。震災後、ハウス内での募金活動や社内での被災された方の受け入れや義援金といった支援を行ってきました。

ついたお餅は、きなこ餅などにして振る舞われましたが、長蛇の列ができていました。日本人はお餅が大好きです。

▼復興（福興）カレー：つづき楽校

ブランド米である“天栄米”を使った贅沢なカレーです。放射性物質無検出である安心・安全な“天栄米”。それに都筑で収穫された野菜を使っの“つづき楽校”特製カレーです。

大好評で、昼すぎには見事に完売！

“天栄米”のカレーを食べ損ねた私は、パンに付けてもらったカレーをいただきました。



▼ダンボール迷路＆図書館：つづきっこ読書応援団

会場の一角に、ダンボールによる迷路が出現しました。子どもたちが次々に入口から迷路に入っていきます。しばらくして元気に出てくる子もありますが、途中で泣き出す子も。早速スタッフの方にインタビューしてみましょう。

“つづきっこ読書応援団”は、文庫を集めている人の集まりで、都筑区内のいろんな学校でボランティアをしたり、



地域ではお話し会をしたりしています。都筑区の子どもたちが読書に親しめるようにしようと日頃から活動しています。メンバーは、大人 30 人ほどです。

いろんな勉強会したり、学校の図書館整備をみんなで情報交換しながら進めたりしています。



昨年（2011 年）2 月に発足、学校・勉強・企画の 3 つの部会を設けて活動しています。



いつもは室内での活動が多いのですが、きょうは“つづき楽校”の趣旨に賛同して、「私たちなりに応援するのはどういうことが良いかな」と考えながら、企画しました。

実は、ここ（ダンボール迷路の内側）は図書館です。ここに並んでいる本は、都筑図書館・司書の人が、きょうのために選んでくれた本です。子どもたちには、ここに入って本を読んでほしいな～と思っています。図書館では、お話し会やエプロンシアターを行います。

ダンボール迷路は図書館の壁です。



ダンボール迷路は、阪神大震災の後に出てきた遊びです。震災によって、閉じ込められ、救出されるまでの恐ろしい体験。子どもたちには、その「暗い・狭い」を日頃の遊びの中で体験し、身体でおぼえてもらおうと良いのではないかなという、というのがダンボール迷路です。パニックゲームという遊びです。



ダンボール迷路では、ところどころで開けていますが、それでも子どもは、怖くて泣いちゃうんです。結構怖いようです。ダンボール迷路は、作り方にコツもあります。真っ直ぐにせず、丸くしています。子どもは、丸くて先行きが見えないと先に進めますが、真っ直ぐで、先が遥かに遠いと、泣いてしまいます。

▼パフォーマンス：マイケルの曲をうたっておどる子どもたち：マイケルラブノイズ



お馴染み“ビート・イット”などマイケル・ジャクソンの曲を、5人の子どもたちが唄って踊っての大パフォーマンスです。



▼ほっとブース：お手紙プロジェクト

会場中央に設けられた“ほっとブース”では、皆さんがひと息ついたり、飲食を楽しんだり、談義しながら、ゆったり過ごしています。

私（山口）は、中島さんからの紹介で、ご主人のご両親が米沢市に住んでいるという方としば

らく談義することができました。この冬も大雪の中、米沢に、しかも車で来られたそうで、大変ご苦労されたそうです。



“ほっとブース”でも“お手紙プロジェクト”が設けられています。

▼パフォーマンス：かなりあ少年少女合唱団+はなうた

私（山口）の“だがしや楽校”レポートではお馴染みになった“かなりあ少年少女合唱団”の登場です。5歳から中学生の子どもたちが、表現することの大切さをモットーに、楽しく唄います。



この日は“はなうた”という大人の人たちも加わっての合唱です。

“はなうた”は“のはらネットワーク”が都筑区役所の委託を受けて開いた講座に集った人たちの中から有志によって新たに生まれたグループです。その講座とは“歌って地域に貢献しよう～地域における音楽の役割～”をテーマにしたもので、“かなりあ少年少女合唱団”を率いる渡辺麻衣さんも講師を務めました。

この2日間の“つづき楽校”の共催団体でもある“のはらネットワーク”は、世代も職業も超えた大人たちがそれぞれの「できること」で表現し発信し「つながる」「社会」「こども」をテーマに永遠に広がり続ける大人たちのネットワーク（市民活動団体）です。

渡辺麻衣さんのメッセージです。

音楽は人と人をつなげます。人の心にメッセージを伝えます。それは音楽の重要な役



割であり、そうして社会の役にたってこそ音楽はその本領を発揮すると私は考えています。

“つづき楽校”で出会った熱く優しく楽しい方々の思い。以前みなさんと一緒にしたとき、そんなみなさんの思いの中にいたことをとても心地良く感じ、エネルギーをもらいました。そして、その思いにたくさんの方々がつながっていくのを見て、そこに世の中をひとつにするような大きな可能性を感じました。

彼らの思いは、きっとかの地をもまきこんでしまうのではないかと思います。みんなをまきこんで元気になろう。そんな時間にすこしでも参加できたら、お手伝いができたら。

そして、そんな経験をぜひ子どもたちにさせたい。そんな思いで、ここに参加しました。

▼パフォーマンス：優月

優月さんは、「心に優しい音楽」をテーマに癒しの音楽を届けるシンガーソングライター。横浜を中心に、首都圏各地でライブ活動を行っています。CDもリリースしていますが、すべてが自主制作・自主活動です。優月さんのメッセージです。

震災後3ヶ月の時には復興支援イベントを行い、全額募金の“復興支援CD”を販売してきました。東日本大震災が残した爪跡を忘れないように、そして今を過ごす事が出来る私達にできる事は何かをみんなで考える、そんな時間を共有できればと思います。



会場には、優月さんの透明感のある優しい歌声が響きました。

◎だがしや談義

井口さんや東さんの紹介で、福島県須賀川市出身という方としばらく談義することができました。須賀川市は天栄村に近く、その方は、吉成さんとは同じ高校の先輩にあたります。ノルディックウォーキングにも取り組んでいるそうです。その方から貴重なお話を聴くことができました。

勤務先は新宿です。事務所は高層ビルの55階です。あの日（3・11）は、大変な揺れで、目の前にある京王プラザホテルがメトロノームのような揺れ方をしていました。

夕方5時半頃、事務所を出て、歩いて帰りました。自宅に着いたのは夜中の2時です。



途中、夜の11時頃、川崎では、ある主婦の方がおにぎりを作り、みんなに配っていました。私もいただきました。あの時は、コンビニにも何もなく、寒かったので、あたたかいおにぎりが本当に美味しかったです。そのおにぎりを包んでいた袋、今でも大事にとっています。

溝の口の駅（川崎市）を歩いていた時、国道246号線への出方がわかりにくかったのですが、ボランティアの人たちが地図を持って「どこへ向かいますか？」と尋ね、行き方を親切・丁寧に教えてくれました。あれで間違っていたら、まったく別方向へ行っていたので、非常に助かりました。大変な震災でしたが、日本人の思いやる力を感じました。

▼コミカルパフォーマー：ペッパーゼロ

これも当初のプログラムになかったパフォーマンス。まさに飛び入り参加というより突撃参加のパフォーマンスです。「東京都板橋区から来た」というペッパーゼロさんは、広島県出身です。センター北駅前で大道芸をやっている関係で、飛び入り参加となりました。



帽子やコップを使ったパフォーマンスからトランプを使ったマジック、さらにはちょっと怖そうなゴム手袋や火のついたトーチを使った大道芸まで、圧倒的なパフォーマンスを披露しました。

▼紙芝居：三宅さん・大橋さん



染物屋さんのお話を紹介していました。

今の子どもたち、染物屋さんって、わかるかな・・・と思うのは大人だけ。写真のとおり、子どもたちは夢中になって紙芝居を見ています。

▼パネルストリート：芽吹きのかい

少しだけですが、私（山口）も設置をお手伝いしたパネルストリート。パフォーマンス舞台の後方に設置しました。パネルストリートには、被災地からのメッセージが地域ごとに紹介されています。設置したのは“芽吹きのかい”です。

中島さんの紹介で“芽吹きの家”代表の中西さんとしばらく談義することができました。

“芽吹きの家”は、「被災地の子どもたちへ笑顔届けたい！！」 そんな想いのママたちが作ったボランティアサークルです。中西さんのお話です。

私たちは被災地に行っているわけではありません。

全国の人からおむつなどベビー用品、それも新品ではなく、余ってしまったものを送ってもらいます。私たちは、被災地のおかあさんと連絡を取り合い、サイズ・ニーズの合うものを聞き取ります。その際、被災地のおかあさんは、周りのおかさんたちにも“芽吹きの家”を紹介し、ほしいものを取りまとめます。それで、こちらから



らは、被災地で取りまとめたおかあさんのところに、まとめて送ります。送られたおかあさんは近所のおかあさんに配ります。コミュニティが広がります。

私たちからの送り先は、保育園が3ヵ所。個人の家が20軒ほど。それぞれ多いところでは50世帯とつながっています。中には、仮設住宅に行って支援しているおかあさんもいます。送り先は、気仙沼市の大島、女川町、南三陸町、陸前高田、いわき市、南相馬市あたりのおかあさんたちです。ブログを通してつながったおかあさんたちです。

私（中西さん）は、これまでボランティア活動をしたことはありません。

東日本大震災から、1週間後には「何かできないか、何かやれたら良いな」と思いました。それで、子どもたちが濡れたまま・汚れたままの服を着ているというのを聞いて、子ども服を集めようと思い立ち、ママ友に声をかけました。そのママ友がさらにママ友に声をかけ、ダンボールで307箱分集まりました。震災から2週間後の3月25日のことです。思っていた以上に集まりましたので“引っ越しのサカイ”さんに、無償で、保管場所の提供、ダンボール箱の提供、被災地までの運搬について、協力をお願いしたところ、快く引き受けてくださいました。4月6日には釜石市・いわき市・北茨城市の子どもたちに送ることができました。

これで終わると、自分たちの自己満足だけになってしまいますので、継続することに意味があると考えました。そこで、母親目線で考え、次は入園・入学のための文房具を集めて送りました。この時は、新品のみ。大切にしていた鉛筆を子どもから託されて持ってきたおかあさんもいました。鉛筆やノートなどが集まり、被災地に行っている企業ボランティアの人をお願いして持っていってもらいました。

次は自分たちで送り先を見つけることはできないものかと思っていたら、仲介してくれた人から気仙沼・大島のおかあさんを紹介されました。それで、5月に直接連絡してみる



と、相当困っていました。そこで、そのおかあさんが児童館など調べて、支援してほしい家庭 50 世帯がわかりおむつ・お尻ふき、子ども服などを送りました。その後も、支援は続きましたが、年末には状況が良くなりましたので、そこのおかあさんたちは“芽吹きの手”を卒業しました。

今“芽吹きの手”が取り組んでいるのは、福島のおかあさんを対象にした“東京里帰り出産プロジェクト”です。福島での出産が心配なおかあさんと、東京でホームステイを受け入れることができる人とをつなげます。また、無償で出産対応する助産医を見つけます。福島のおかあさんは東京でホームステイしながら出産し、出産後も落ち着くまでホームステイ先で暮らしてもらいます。落ち着いたら福島に帰りますが、その際にはミルク・洋服・おむつなどを支援します。

“芽吹きの手”のメンバーは3人ですが、仕分け作業ではママ友つながりで 50 人は集まります。モノを送るのではなく心を送ることを心掛けていますので、すべてのモノに必ずメッセージを書きます。そして、“芽吹きの手”は要らない」と言われるまで活動が続けます。

▼パフォーマンス：南京玉すだれ：都筑民家園 南京玉すだれ愛好会

“芽吹きの手”の中西さんと談義している間に、パフォーマンスは終わってしまいましたが、時間が空いたため、急遽子どもたちのための“南京玉すだれ体験教室”が開かれました。その様子を見ながら、インタビューしました。



都筑民家園（※注）を拠点に活動しており、定例のおけいこや民家園のイベントで玉すだれをしています。また、老人ホームや各地のイベントなどにも出向いて玉すだれを披露して笑顔をいただいております。



メンバーは 15 名あまりですが、いつもやっている人は 10 名ほどです。活動をはじめて 10 年です。民家園という民家を使った公園で「南京玉すだれをやってみませんか」という体験会を開いた時に集まったのが初期のメンバーです。その後いろんな方が加わりました。子どもの頃からやりたいと思っていた人が結構集まりました。老人ホームなどで演し物としてやりますと、喜んでもらえます。それがやり甲斐です。

南京玉すだれは、そんなに難しいものではありません。仕組みがわかると素人の方でもできます。ただ、見せ物としてのしゃべり・セリフをおぼえるのが一番難しいかな。

※注：都筑民家園（横浜市役所 環境創造局都筑民家園：神奈川県横浜市都筑区大圃西2）横浜市都筑区の大塚・歳勝土遺跡公園内にある、江戸時代の建物を復元した古民家です。多くの地域交流イベントや文化事業を行っています。



図子さんたちの呼び掛けが始まりました。あの時刻が迫ってきたからです。

私（山口）も呼び掛けを手伝いました。大勢の人たちが、ステージを中心に、広場中央に集まりました。

正確な時刻をチェックしていた私は、10秒前から3秒前までカウントダウン。

そして、2012年3月11日14時46分。黙祷



続いて、現在仮設住宅に住んでいるという宮城県名取市の高橋さんから寄せられた“ありがとうの詩”が朗読されました。



◎ありがとうの詩 Takahashi Hisako（宮城県名取市）

ありがとう

鳥のように空を飛んで ありがとうを届けたい

太陽のような笑顔になって ありがとうを届けたい

風になって みんなの耳元に ありがとうを届けたい

ありがとう ありがとう 言い尽くせぬありがとう

「ありがとう」の「あ」は

あたたかい心 あたたかい食べ物 あたたかい衣服をありがとう

「ありがとう」の「い」は

立派に復旧・復興するために助けてくださった皆さんにありがとう

「ありがとう」の「が」は

「がんばろうね」と声をかけてくれて ありがとう

「ありがとう」の「と」は

突然なにもかも無くなったけど 世界の人が支援してくれて ありがとう

「ありがとう」の「う」は

うれしかったよ 歌が歌える気持ちが少しずつ出てきたこと

化粧でもしてみようかな という気分になったこと

みんなの支えがあったから ありがとう

いつか恩返しができるかな

元気であることが恩返しなんだよ と言ってくれた

風 優しい風があなたのほほをなでたなら ありがとうの気持ちを受け取ってください

鳥 小鳥のさえずりが優しく聞こえたなら ありがとうの気持ちを感じてください

虹 雨上がりにきれいな虹が出たら 皆様のおかげで希望を胸に前に向かって進んでいる
私たちのことを思い浮かべてください

ありがとう ありがとう 言い尽くせぬありがとう

光 太陽が朝モヤを照らしたら 光とともに笑顔になっている私たちのことを

暗闇から徐々に朝焼けになるように 私たちの心も少しずつ明るくなってきたろう

雲よ ポッカリ浮かぶ雲よ 鏡になって 風を光を届けてほしい

言い尽くせぬありがとう

雨上がりも 虹も届けてほしい

世界みんなに ありがとうを

鳥よ 雲よ 届けてほしい

みんなの応援で前向きになれたことを

月よ 星よ 届けてほしい

みんなの願いが届いて、笑顔が戻ったことを

最後に、富岡秀二さんの指揮の下、東北に向かって、全員で“故郷”を歌いました。



◎図子さんの閉会の挨拶

きょうは24団体の方がこの広場に集まってご協力いただきました。

みんなの思いが、今の“故郷”の歌とともに、東北の方を元気付け、日本中を元気付け、原発の恐怖に戦っている皆様の心を少しでもやわらげてもらえたらうれしいなと思います。

東北の方たちの「忘れないで」という思いを私たちは「忘れないよ」という返事でお返ししたいと思っています。これは、ずっとずっと続きます。今年が始めの一步です。来年・再来年、そして何年続くかわかりませんが、1年に一度は「忘れないよ」という思いを持って続けていきたいと思っています。

本日は本当にありがとうございました。



午後3時、“つづき楽校：あったか復興支援 わすれない 3.11”の2日目“復興支援ひろば”が終了しました。

センター北駅前という最高のロケーションということもあり、本当に大勢の横浜市民・都筑区民が集いました。人数は把握できませんでしたが、数百人の人たちが集ったと思います。

でも、大切なのは人数ではなく、“復興支援ひろば”によって、ひとりでも多くの人々が、大震災と原発事故へ思いを寄せ、考え、行動につながることです。そういう意味でも、この日の“復興支援ひろば”は意義があります。

一方で、視点を変えますと、ロケーションが良すぎたために、通りすがりの人から「子ども向けのイベントをやっているみたいね」という声が聞かれたように、単なるイベントと見られてしまった面がありました。

ただ、パフォーマンス舞台の後方には大きく“あったか復興支援 わすれない”と表示してあること、この日は“3月11日”であることからすると、ちょっと気にとめてもらえば、単なるイベントではないことがわかるはずです。

とは言え、単なるイベントと見た人がいたことについては、私（山口）も含めて、重く受け止めなければなりません。

* * * * *

《振り返り》

全体を振り返る前に、ひとつ申し上げたいことがあります。

私（山口）が“つづき楽校・あったか復興支援 わすれない 3.11”の開催計画を知ったのは、昨年（2011年）11月でした。それを知っただけで私は高く評価しました。そして、絶対に現地で取材することを決めたのでした。

しかし、それから5ヶ月の間には、私の中で葛藤があったことも事実です。

まずはなんと言っても「1年目の3月11日を、山形・米沢を離れて、横浜・都筑で迎えて良いのか」という葛藤です。この日は、米沢市でも地元のボランティア団体と避難者支援センターなどが中心になって、追悼及び復興を祈願する式典並びイベントが開催されることも葛藤の要因となりました。

前日の3月10日には、“だがしや楽校@山形市避難者交流支援センター”が山形市で開かれます。この“だがしや楽校”には、山形市及びその周辺地域から数多くの“だがしや楽校”仲間が参加することになっており、こちらこそ是非とも取材したいと思ったのでした。

というわけで、ますます葛藤は深まるばかりでした。

しかし、市民活動としての“つづき楽校”は“だがしや楽校”という域を超えて見事に成長していること、“だがしや楽校”仲間では前例のないことをこの2日間で実施しようとしていることから、あえて1年目の3月11日を横浜・都筑区で迎えることにしたのです。

さて、“つづき楽校：あったか復興支援 わすれない3.11”の2日間が終わりました。

素晴らしい2日間でした。私（山口）にとっても、新たな出会いがたくさんあり、とても意義ある2日間でした。

また、“つづき楽校”が成長していることを、見事に「みせ」てくださった2日間でもありました。発想から始まり、企画力・計画力・実行力には本当に感心しました。これは、“つづき楽校”の人たちのパワーが結集したものだと思います。

そうしたパワーが天栄村ともつながったのでしょう。今後も天栄村との交流が続くとお聞きしました。本当に素晴らしいことです。

このように、とても素晴らしい2日間でしたが、いくつか感じたこともありました。

まず申し上げたいのは、天栄村の事例は、ひとつの福島にしかすぎないことです。

同じ福島県でも、地域によって、考え方や気質はまったく違います。だから、今回の震災・原発に対する感じ方・考え方も、まったく違ってきます。さらに厳密に言うと、ひとりひとり違っているのです。

私（山口）は、少なくとも週1回は、故郷を離れて生活している福島県の人たちと『いっしょの場にいる』という活動をしています。それで、今回の2日間から感じることもあるのです。それは、福島の人たちは、ひとりひとり置かれた状況が異なっている、ということです。

それは、福島だけでなく、東北全体にも言えます。

直接の被災地・被害地域は、福島・宮城・岩手です。しかし、大変な状況に置かれているのはそこだけではありません。山形県をはじめ周辺地域も大変な状況に追い込まれています。

同じ東北の人間として、東北・福島に目を向けてくださるのは、とてもありがたいのですが、まずは、このことをわかってほしいと思います。

3月10日の“交流会・懇親会”では、少し時間をいただき、山形・米沢の状況をお話することができました。しかし、話す前に「短く話してほしい」と言われたことは、残念に感じました。何度も申し上げますが、山形・米沢で今起きていることは、戦争直後の混乱期を除き、戦後に日本では過去に経験のない事態なのです。

東北・福島を「わすれない」という気持ちが本当にあるなら、まずは謙虚に知ることが大切です。いろんなことを知ることです。

そういう意味では、3月10日の“講演会&座談会”は意義がありました。繰り返しますが、“だがしや楽校”仲間において、市民の人たちだけ“講演会&座談会”を開いたのは、これが初めてです。“だがしや楽校”にとっても新たな第一歩と言えます。

ただ、“講演会&座談会”では、3人から話を聞くことができたものの、これも一部の情報にしかすぎないことをわかってほしいと思います。本多教授の講演も、ひとつの見解として聴講することです。

時間の関係で、3人からの一方的な講演だけで終了となってしまう、座談会（会場の人を交えての意見交換）の時間がなかったのも、ちょっと残念でした。

広い視野を持って、いろんなことを知った上で、“つづき楽校”として、出来る事で支援することです。ここで無理をしたり、背伸びしたり、気負ったり、思い詰めてしまいますと、「わすれない」という気持ちは、長続きはしません。

そういう意味でも、“つづき楽校”として天栄村と交流していくことはとても良いことです。それが“つづき楽校”らしさにつながります。

3月11日の“復興支援ひろば”では、先にもご紹介しましたが、“とつかのおもちゃ箱・だがしや楽校”でお会いした方と再会する場面もありました。

それで感じたことがあります。“つづき楽校・わいわい横丁”（2010年11月14日開催）では、杉並・下野・藤沢善行など地域を越えた“だがしや楽校仲間”が集い、おみせを出しました。

振り返って、市民活動支援講座“つづき楽校”を始めるにあたって、私（山口）がわかっているだけでも、中島さんたちが杉並や藤沢善行と交流され、そこで学んだ経緯があります。そういう交流を、これからも大切にしてほしいと感じました。

“だがしや楽校”をベースに、“つづき楽校”は成長しました。そして、これからも成長し続けるでしょう。一方で、地域を越えた“だがしや楽校”仲間とのつながりは、いつまでも宝してほしいと思うのです。

最も大切なのは「つづき楽校らしさ」です。

そのためには、広い視野が大切です。

そして、地域を越えた“だがしや楽校”仲間とのつながりも大切になります。

2日間、“つづき楽校”の皆様をはじめ、多くの人たちにお世話になりました。

心より感謝を申し上げて、報告をおしまいにします。

企画・制作・編集・文責

山口充夫

だがしや楽校コーディネーター